共育事業｜個別伴走・地頭ラボ

中学受験も見据えて、まず「学びの土台」を

本人に合った Daily×Weekly で、「やらされる学習」から「自分で始める学習」へ

将来の中学受験も視野に入れた、小学校低学年のお子さまへの個別伴走事例です。塾や教材で知識を増やすことに加え、その学びを本人の力として活かすには、自分から始める、分からないときにも考えてみる、考えたことを言葉にするという土台が欠かせません。Uni-One では、アセスメントと保護者との対話をもとに、本人に合ったプログラムを設計しました。

BEFORE｜取り組み前

学校から提供される計算ドリルの反復を負担に感じ、次第に算数そのものに苦手意識を持つようになっていました。学習を始める際には、周囲からの働きかけが必要な場面もありました。一方、推理や規則性を見つける問題には強い関心を示し、難しい問題にも自分なりに考えて取り組む力がありました。

VIEW｜Uni-One の見立て

算数の力が不足しているのではなく、同じ形式を繰り返す学び方が本人に合わず、苦手意識につながっている可能性があると考えました。そこで推理・図形・規則性を入口に、「考えると分かる」「工夫すると解ける」という感覚を育てることから始めました。

育てたい学びの土台			
1　自分から始める	2　少し考えてみる	3　考えを言葉にする	4　振り返って続ける

ACTION｜一人ひとりに合わせて実施したこと

Daily	Weekly	Review
計算・推理・図形・文章題・国語を組み合わせ、無理なく始められる分量と、もう少し考えたくなる問題を個別に設計。基礎的な計算にも毎日少しずつ取り組みました。	「どう考えたの？」「ほかの方法はある？」と問いかけ、自分の考えを言葉にする時間を設定。地頭ラボでは、保護者や大学生など世代の異なる人と考える体験も取り入れました。	得意な問題、時間がかかる問題、楽しんでいた場面を振り返り、次の教材と関わり方を継続的に調整しました。

AFTER｜表れた変化

- 毎日の教材に、自分から取り組むようになった
- 推理や図形を楽しみ、算数への苦手意識が和らいだ
- 難しい問題でも、すぐに答えを求めず考える場面が増えた
- 言葉を丁寧に読み取る問題にも挑戦するようになった
- 多世代との対話を通じて、考えたことを伝える楽しさが広がった

保護者からも、日々自発的に教材へ取り組み、難しい問題にも前向きに挑戦している様子が継続して寄せられました。

この事例から見えたこと

中学受験に向けて塾や教材を選ぶことは大切です。しかし、その学びを本人の力に変えるためには、自分から始める、考えることを楽しむ、分からないときにも工夫するという土台が必要です。Uni-One は、一人ひとりの強みと止まりやすい場面を見ながら、その子に合った学び方と続け方を一緒につくります。

※個人が特定されないよう、氏名・学校名・正確な学年等は掲載していません。内容は保護者の確認・了承を得たうえで掲載しています。変化の表れ方には個人差があります。